

出荷から加工に転換 四代続く老舗商店

竹松商店は明治20（1887）年に創業。130年以上の歴史があり、現在は四代目の川端利幸さんが6人の従業員とともに竹細工職人として働いています。

創業当時は、数珠づくりなどの木の加工が中心でした。初代・松之助さんから事業を引き継いだ二代目・利喜松さんは、竹藪を買い付けて技術者育成を開始。近江八幡市には琵琶湖に注ぐ河川がいくつもあり、河岸に良質な竹が生育していたことも背景にありました。



昭和期の竹松商店。背の高い竹を運ぶこむため高い天井になっている作業場は今も受け継がれています

昭和初期にはまだ竹加工の技術が発達していなかったため、当時は竹そのものを出荷する仕事が多かった。竹を出荷状態に仕上げるとは、整竹と呼ばれる加工が必要で、まず、余計な枝穂を切って長さを整えた竹を、熱湯に入れて長時間煮詰めます（油抜き）。取り出した竹を乾拭きして磨き上げ、仕上げに2〜3カ月ほど天日干しにします。冬の寒風にさらすと若竹色の竹は白く様変わりし、竹製品づくりに適した耐久性を持つようになるのです。

やがて竹松商店は、竹の加工業へと転じます。さまざまな竹加工品をつくる中で、特に多く売れたのが国旗を掲げるための旗竿や手旗竿でした。「祝祭日に玄関先に国旗を掲揚する文化が根強く残っていた時代だったのですね」と川端さん。

同店は今なお、琵琶湖のほとりや八幡山に竹藪を所有しています。総面積は東京ドーム1個分の広さに該当する約4500坪。春になると竹藪に生えてくる筍を間引く作業があり、管理にもひと苦労です。



④春には所有する竹藪で筍を掘り、間引きます。傘を差して歩ける範囲で竹が生えているのが理想 ⑤熱湯に竹を一本ずつ入れ、湯抜き式で行う油抜き。水分を飛ばしてカビの発生を抑えることが目的です ⑥油抜きを終えた竹。2〜3カ月ほど冬の寒風にさらし水分を飛ばせば緑から白へと色が変わります

巻頭特集 創業明治20年竹松商店

竹に込めた誇りを後世に

近江八幡市にある老舗の竹加工会社、竹松商店。竹の曲げ加工に秀でる同店では近年、自社アイテム製作に取り組み、私たちの生活に身近でお洒落なアイテムを生み出しています。

百年以上続く秘訣は 曲げ技術へのこだわり

竹加工品は海外から仕入れた安価なものも多く、価格勝負では太刀打ちできません。竹松商店は竹を曲げる加工技術に特化し、店を守り続けてきました。

同店がいま最も多く手掛けている主力商品は提灯弓です。提灯を張る弓状の持ち手にあたる部分で、一般的には金属やプラスチック製が多いものの、祭りで長時間提灯を持つ場合には軽量の竹製が重宝されます。

提灯弓製造に欠かせないのが曲げ加工です。竹の表皮を整え、染色を施し、乾燥機や天日で乾燥させたのちに熱を加えて一本一本曲げる工程です。特に工芸品などで使う直径10〜20ミリほどの細い丸竹は、節も多く、曲げると折れやすいので、火や力の加え方には熟練の技術が必要です。「伝統技術を後世に伝えるためには、職人のモチベーション維持が不可欠でした」と話すのは、広報担当を兼ねる片山祐里さん。提灯弓などの仕事はあくまで発注先から請け負う加工品のいち工程に過ぎず、一貫したものづくりに対する憧れは年々強ま



提灯弓製造の様子。曲げ、塗装をして最後にビスで止めて完成します

るばかり。川端さんは四代目を預かる身として「消費者の手に直接届く商品をつくれれば、職人たちのさらなる誇りを生み、技術力向上にもつながるのではないかと考えました」。

転機は平成30年、滋賀の伝統的工芸品支援プロジェクト「BIWA KOTO」との出合いでした。地域の伝統技術や素材を現代の生活のなかに取り入れようという取り組みで、まさに竹松商店の思惑と一致。実行委員と協働での新しい挑戦が始まりました。

先人の技術に発想を加え 現代向けの竹製品を生む

伝統技術と新しい感性が合わさった末に、竹松商店を含むプロジェクトチームがたどり着いたアイテムは竹製のツールでした。昔ながらの竹製の椅子に着目し、それを現代風に生み直そうという発想で、決定までにさしたる時間はかかりませんでした。

しかし、製作に入ると、デザインと耐久性の両立に難航します。形を変え、高さを変え、考えうる限りの手法で試作品をつくるも、なかなかうまくいきません。「ひよつとして構造的に不可能なものでは……」と諦めかけたこともありましたが、チーム全員で話し合いを続け、解決策を模索しました。

幾度のトライアンドエラーを重ね、見出した活路は、原点回帰。竹を斜めに組んで脚とする昔ながらの鼓椅子の形状にしたところ、耐久性が確保でき、渾身の一品が完成したのです。

昔ながらのシンプルな技法で 現代の若者の心に響く逸品を。



⑦ガスバーナーを用いる曲げ加工。発注元からの細かな要望に丁寧に応えます ⑧祭りで使われる巨大団扇。一本の竹を裂き、細かい骨をつかって左右に広げていきます



「結局、昔ながらのシンプルな技法が良かった。やはり先人は偉大です」と、川端さんと片山さんは口をそろえます。

完成したツールは、琵琶湖（BIWA KO）と竹（BANBO）の頭文字から「BBツール」と命名。天板の仕上げのみ外部委託ですが、竹を切り、塗装して組むところまで竹松商店が一貫して手掛けます。ピスの大きさ、クッションの厚みなど細部にもこだわり、耐久性を備えながら一脚約1キロと軽さも実現。気軽に置き場所を変えられるインテリアとしての柔軟性と、持ち上げやすく掃除の邪魔にもならないという機能性が両立している点がユーザーに好評です。黒、青、ピンク、竹そのもののナチュラルカラーと4色あり、受注生産のため「横枠だけピンクにしてほしい」といった声にも対応可能。一般家庭だけでなくカフェや美容院からも注目を集めています。

「130年の歴史の中で、ワンストップオーダー製品を完成させたのは初めてのこと。ぜひご家庭やお店のインテリアとして活用してほしい」と思いを語る川端さん。明治期から続く老舗商店は、時代に合った竹製品で新たな道を切り開きます。



information

有限会社竹松商店

近江八幡市中村町703
☎ 0748-33-3268

BBツールはオンラインから注文可
www.tkm.co.jp



片山祐里さん

若手職人として活躍する傍ら、広報も兼任。BBツール開発時には会社の窓口として活躍しました

BBツールには背の低いSサイズ、天板を置いたサイドテーブルタイプなどがあります